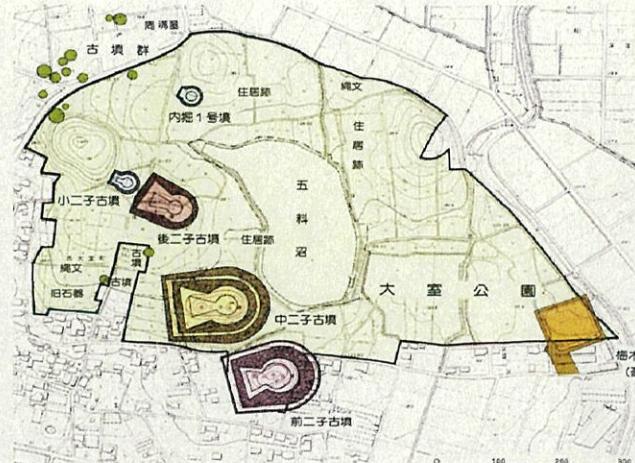


# 平成28年度 県教研中学校社会科部会地区別巡検研修

## 1. はじめに

平成28年度の県教研中学校社会科部会地区別巡検研修は、赤城南麓の中央に位置し豊かな歴史・自然環境を生かした前橋市を代表する「大室公園」内に所在する6世紀代の国指定史跡である4基の前方後円墳と江戸時代末期の赤城型民家について前橋市教育委員会文化財保護課並びに「大室古墳群の語り部」の皆さんのご協力のもとで4つの班に分かれ現地研修を実施した。

## 2. 大室公園の整備について



大室公園内には4基の国指定史跡の古墳がある（南より、前二子、中二子、後二子、小二子古墳）。これらの4古墳は6世紀初頭から後半にかけて築造された前方後円墳である。これらの古墳は昭和2年4月8日付で、すべてが国指定史跡となっている。また、4古墳の指定範囲の公有地化は、昭和51年度から53年度の国庫補助事業による買い上げ、及び昭和59年度の市費による買い上げを実施してきた。

前橋市東部の赤城南麓地帯に位置する大室地区は、群馬県でも遺跡の多い地域で、特にこの地区は東日本の古墳文化を考える上で欠かすことのできない遺跡として古くから知られてきた。また、一帯は赤城山や谷川連峰をのぞむ風光明媚な地区であり、前橋市ではこうした豊かな歴史的、自然的環境を生かし、「大室公園」の建設を計画した。そして、建設にあたり、計画地内の史跡4基の古墳を総合公園の計画の中に位置づけ、公園計画との調和を図りながら、保存、整備をしていくことになった。具体的には、平成3年度から8年度にかけて、整備に備えた4古墳の諸調査を順次実施した。こうした中で、遺跡の保存と積極的な活用を目指し、調査の基礎資料を基に平成9年度から13年度まで国庫補助事業により4基の古墳すべてにわたる保存整備事業を実施してきた。

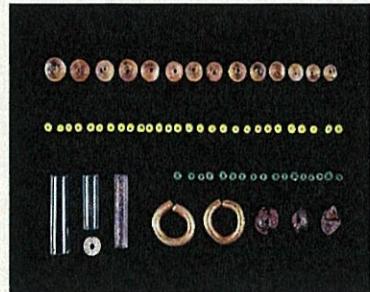
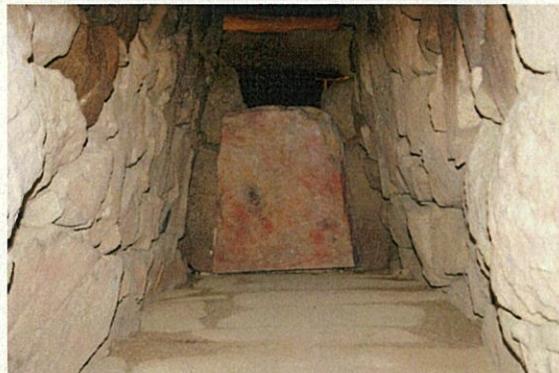
またその間、前二子古墳に関しては石室の痛みが激しいため、横穴式石室がつくられた頃の貴重な石室を保存するため、3ヶ年計画で石室保存修理を実施した。

また「調査・整備の具体的方法」については、すべての古墳の整備に関して、経年変化により、周囲の自然環境と同化しながらきわめて良好に遺存してきた現在の姿を生かすことを主眼として、現状の豊かな自然環境を可能な限り維持する方向での整備を実施してきた。

そして、後二子、前二子、中二子古墳の3基の古墳は範囲確認調査、小二子古墳については、唯一築造時の姿への復元整備のため発掘調査を実施した。



## 2. 前・中・後・小二子古墳について



石室に副葬された装身具と土器

### 前二子古墳石室内部

前二子古墳は、大室公園内の4つの国指定史跡の古墳の中で最も古い古墳で6世紀初頭に作られた前方後円墳である。規模は墳丘の長さが93.7m、高さ13.7mで、周堀とさらに外側に外堤と外周溝があり、それを含めると全長約148mほどある。また、二段の築成で上段部に葺石が確認されている。この古墳も明治11年に地元の方により調査されている。その際に出土した遺物は、四神付飾土器（小像付須恵器装飾器台：カメ、鳥、蛇と蛙、小像）をはじめとした土器、装身具、鏡、金メッキされた馬の飾り金具等がある。また当時の記録によると現地見学会に6000人もの人が訪れたという記録も残っている。さらに、明治13年には当時のイギリス人外交官、アーネスト・サトウにより世界にも紹介された古墳である。

石室については、関東地方に横穴式石室が導入された最初のもので、全長13.89m、羨道と玄室部からなり、石室内は「ベンガラ：赤色顔料（酸化第二鉄）」で赤く塗られ、床面は加工された凝灰岩が敷かれていた。



### 中二子古墳の中堤に再現された埴輪列

中二子古墳は、6世紀前半に作られた大室古墳群の中で最も大きく立派な古墳である。内堀や中堤、外堀が巡り、内堀には工事や儀式の時に使用した「わたり」も存在している。また多くの埴輪が出土しており、藤岡周辺で制作されたものであると確認されている。さらに、この古墳は石室は見つかっておらず、どのような副葬品が納められているかという謎も残されている。

後二子古墳は6世紀後半に作られ、地中を掘って石室を低くすることで墳丘の盛土を節約している。円筒埴輪も小型になり間隔をあけて使われている。また、この頃から「追葬」が行われるようになり、複数の人物が石室内に葬られている。

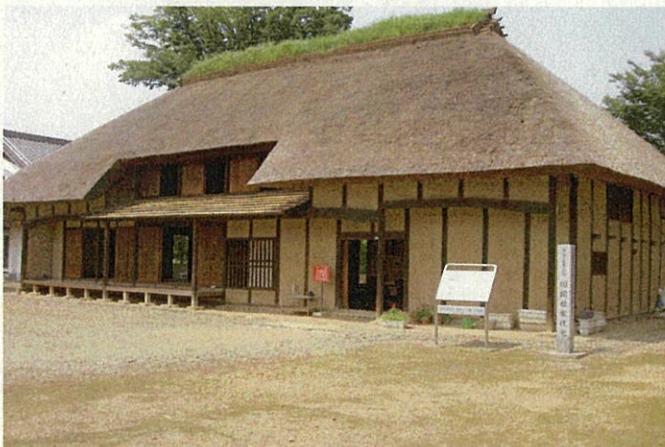
小二子古墳は後二子古墳と同時期に方向を揃えて造られていることから、後二子古墳とかかわりの深い人物の墳墓であると考えられている。この古墳からは、人物・馬・家・太刀などの形象埴輪や円筒埴輪が、後円部と前方部の二つのグループに分けられ設置されている。

### 後二子古墳石室入口



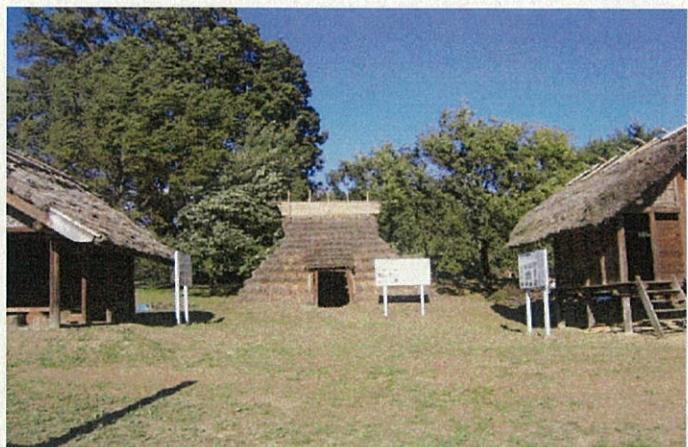
復元された小二子古墳

### 3. 大室民家園について



赤城型民間園

付属施設の「旧関根家住宅」(通称：赤城型民家園)については、赤城山南麓に特徴的にみられる養蚕農家を移築した施設である(屋根裏で行う養蚕の採光と通風を得るために、屋根正面の一部が切り落とされているところに大きな特色がある)。平成7年度から10年度の4ヶ年で整備工事を実施し、すでに完成している。その他に、発掘調査結果を基に建設された古代住居がある。この事業の実施にあたっては歴史体験学習の一環として、市内の小中学生を始め市民に参加を呼びかけ、平成10年度から12年度までの3ヶ年計画で、1棟ずつ竪穴式住居、高床式建物、平地式住居の順で建設し、現在公開している。



古代住居

### 4.まとめ

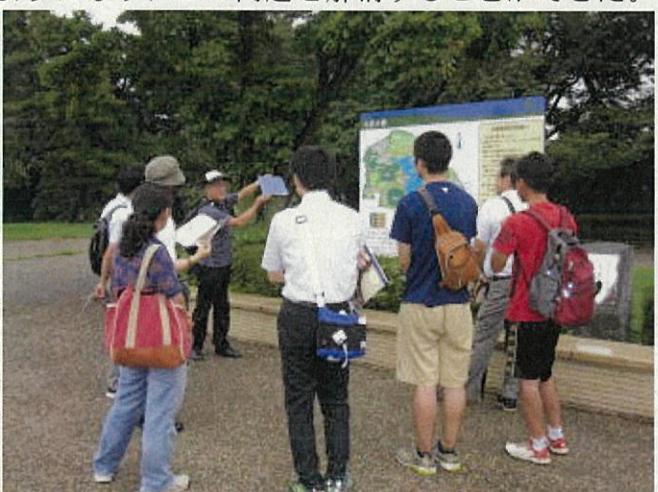


復元された前二子古墳玄室内の土器

また、移築復元した民家園の管理運営については、地元の老人会を母体とした「赤城型民家保存会」に民家園の戸締り、清掃、見学者への対応等の管理業務を委託している。民家園は4月から11月までは月曜日を除いて開園し、12月から3月までは土、日、祝日のみの開園で、時間は午前9時から午後4時までである。これは、地元組織との連携による運営によって地域の方々の連携を深める街づくりの一助になっていると考えられる。また、今回現地において説明を担当してくれた「古墳の語り部」の皆さんも、こうした歴史に興味ある一般の方々を勉強会において育成し、語り部として活躍していただいているそうである。改めて歴史を継承する地域の重要さを痛感した。

今回の研修は大室公園内の古墳群の調査成果と整備状況について、専門の担当者より貴重な話をたくさん聞くことができた。その中で、「現状の豊かな自然を可能な限り維持する」方向での古墳整備のため、当然日常における「緑」の管理が問題になり、整備後は予想していたとおり、公園面積36.9ha、史跡面積5ha弱の広大な「緑」の管理について問題が生じた。

この問題に対して平成18年度から「緑」の管理については、市公園緑地課が一括して行うことになり、草の生える梅雨時から夏場にかけても、こまめに草を刈ることが可能になり、訪れる人にとっても気持ちよく史跡を見学できるようになり、この問題を解消することができた。



「古墳の語り部」の皆さんによる解説